

と、幹太郎は早口に云つて、

「ちや行つて呉れますか？」

「うん。行かう！」

「ありがたう！ ちや、これから行きませう。僕が案内します。」

「案内して呉れなくても、番地が判つてゐれば、僕一人で行きますがね。しかし、今夜はもう遅いぢや無いか？」

「未だ八時を一寸過ぎたばかりでせう。行つて下さい。」

幹太郎は、もう立ちあがりかけた。

益夫も否み兼ねた。彼は、手早く外出の仕度をして、幹太郎を先に立てて家を出た。

「一寸、出て来るからね。」

玄關迄おくり出した小夜子に、かうやさしく云つた。小夜子の黒く濡れた眼は、思ひ惑ふやうに悲しげにふるへてゐた。小夜子は、益夫が何處に行かうとしてゐるのであるかを知つてゐるらしかつた。

「すぐ歸つて来るからね。」

益夫は、一寸その肩を抱くやうにして、耳もとに囁やいた。

電車に乗つてからも、幹太郎は、ひどく思ひつめたやうにして一語も口を利かなかつた。彼の眼はきら／＼と燃え、折々ほつと吐く息は火のやうに熱かつた。

「君、ひどく熱があるやうぢやないか？」

益夫は、その顔をのぞき込むやうにして聞いた。

「えゝ。又、すこし風邪を引いた。昨夜、雨に打たれたんでね。」

「苦しさうぢや無いか？」

「身体は苦しかあない。」

「苦しいのは此の心だ——といふやうに幹太郎は云つた。

「だが、大分熱がひどいやうだがね。」

「なあに、八度ちよつとぐらゐです。」

「八度？ 大へんぢやないか？ そんな身体で出歩いたりしていゝんですか？」

「あの人に會へさへすれば、死んだつて構はないんだ！」

幹太郎は、うるささうに云つて頭を振つた。益夫は嘆息して口を噤んだ。

今夜も、野分めいた風が立つてゐた。空には雲切れの間から星が輝いてゐた。電車を捨て、しばらく横町から横町へと、次第に淋しい暗い道へと益夫を導いて行つた。幹太郎は、その『志賀』としるされた軒燈の前に來ると、

「此家です！」

と云つて、ぴたりと立ちどまつた。

「あゝ、こゝか？」

益夫は、植込の中に奥深く引込んでゐる家の氣配に耳をすますやうにしながら聲をしのばして、

「で、その間、君はどうしてゐます？」

「僕はこゝに待つてゐます。」

「こゝに立つてゐるんですか？」

「えゝ、會つてくれると云つたら一寸呼んで下さい。それまでは此處に立つてゐます。」

「こんな吹き曝らしに立つてゐちやたまらない。そんな熱のある身體で。」

「昨夜は雨の中にだつて立つてゐた。何でも無いんです。——ですが、そんなにあなたが心配して下さるんなら、僕は、あの角の珈琲店へ行つて待つてゐます。」

「ぢや、然うして呉れ給へ。」

益夫は、然う云つて門をはいつて行つた。

ベル・ボタンを押して玄關に立つて、しばらく待つてゐると、女中が取次に出た。

「奥さん、いらつしやいますか？」

「はあ。」

女中の面上には稍苦澁の色が浮んだが、

「どなた様で？」

と問ひ返した。

益夫は、名刺入を探つたが、生憎一枚も無かつた。

「辻といふ者です。奥さんに一寸お目にかゝり度いんですが。」と口頭で云つた。

女中は引込んで行つたが、なか／＼出て來無かつた。矢張會はないつもりか知ら？ 益夫は半ば絶望的な心持で、五分近くも待つた。それは幹太郎の爲めでは無かつた。彼自身、是非一目彼女を見たい願ひが、遺瀬無く胸に燃えた。——さう、深くは無い家の構へなので、奥の間の方の物の氣配がそれと無く傳はつて來た。押しつけるやうな男の聲がする。何とな、不穩なものが感じられる

彼女の夫が居るのだらう？ 悪い時に来てしまった。矢張明日、もし彼女の夫が勤め人ならば、勤めに出了留守であらう折を窺つて来るのだつたと益夫は輕舉を悔いる心にもなつた。やがて、女中が引返して來た。斷わられるのかと思つてゐると、

『どうぞ、おあがり下さいませ。』

といふ案外尋常な返事だつた。

益夫は女中に案内されて、玄關脇の客間に通された。火鉢が運ばれ、茶が運ばれた。

『唯今、すぐにいらつしやいます。一寸、お待ち下さいませ。』

さう云つて退つて行かうとする女中に、

『あの、奥さんにお目にかゝり度いのですが——』

と、益夫は念を押した。若しかしたら、主人へ會ひに來たものと、女中が聞き違へてゐはしないかと思つたからである。

『はい。奥さまが、唯今すぐにいらつしやいます。』

それを聞いて益夫はほつとした。

が、十分以上も然うして待つてゐたが、八千代は出て來なかつた。火鉢の前にきちりと坐つた益

夫は、煙草を燻らしながらみだれる心押し鎮めてゐたが、二間ばかり隔てた部屋での物の氣配が氣になつた。何か罵るやうな野太い聲、それと揃み合ふ稍々甲高な女の聲——。女の聲は八千代の聲に違ひ無かつた。

と、すうと息を引くやうにして頭の上の電氣が消えた。停電だつた。益夫は、煙草の火を見つめながら、暗闇の中にほつんと坐つてゐた。

突然、障子の外でばた／＼と足音がした。と、同時にヒステリックな女の聲が——八千代の聲がはつきりと聞き取られた。

『私のお客様に私がお會ふんですよ！ あなたは引込んでいらつしやい！』

追ひすがるやうな足音と共に、男の聲がかう云つた。

『いや、おれが會ふ！ おれが會つて話をする。』

『あなたに何の話があるんです。私のお客様に失禮な真似をすると承知しませんから！ まあ、何て無作法な人でせう？ 本當に呆れてものが云へやしない。』

障子が引きあけられ、ぴしりと強くしめられた。はいつて來た人は、火鉢のむかうに疊を煽つて崩れるやうに坐つた。

「生憎の停電ね。こんな暗いところに長くお待たせして本當に失禮致しました。」

久振で聞く懐しい聲だつた。だが、何といふ荒んだ無恥な調子であらう？ 益夫は、ほの白く輪郭を浮べたその顔を見やりながら、言葉も無く押黙つてゐた。

「今夜は來ないつもりだつたのよ。それが、先刻、だしぬけにやつて來て頑張つて居るんですの。何かへんに邪推をして、妙な事を云ふんですの。本當に馬鹿々々しいツたら無い！」

重くねばりつくやうな言葉附は、酒に酔つてでもゐるやうだつた。——だが、何といふ妙な言葉だ。益夫は、呆氣にとられた。

「だまつていらつしやるのねえ。あまり長くお待たせしたので怒つていらつしやるんですの？ それとも、あの男が居たんで氣持を悪くなすつてゐるの？ あんな男の事など氣になさる事は無いのよ。何もびく／＼なさる事はないわ。少し酔つてゐるもんだから、あんな大きな聲を出したりするんですけど、からかし、意氣地の無い男なのよ。ほ／＼。」

朱檀の卓の端にしどけない姿勢で身體を凭せかけた八千代は二の腕を仄白く頬杖にして、早口にこんな事を云ふのであつた——益夫は、狐にでもつま／＼れたやうな氣がする。果してこれが八千代か知ら？ とさへ思ひ惑ふのであつた。

「あら、どうしてそんなに黙つていらつしやるのよ。まるで、嘔見たいね。あなたは——え、腹をお立てになりましたの？ まあ！ あなたもする分怒りん坊ね。」

「怒つては居ません。」
「怒つては居ませんなんて——なんて、どうして四角張つた言ひ方をなさるの。をかきな人ね、鈴木さんは？」

鈴木——？ 益夫ははじめて了解した。八千代は人違ひしてゐるのであつた。

「鈴木？ 八千代さん、あなたは、間違へていらつしやるのです。僕は、鈴木ではありません。」
「あら！」

八千代は彈かれたやうに叫んだ。
「ぢや？ ごなた？」

「僕がわからないのですか。辻ですよ。」
「ツジ？ 辻さん！」

「さうです。女申さんが、間違へたんですね。辻です。八千代さん本當に久振でしたねえ。」
「まあ！」

と、再び叫んだ時であつた。女中が籠行燈に燈を入れてそして持つて來た。極度のおどろきに撃たれた八千代の顔を、ゆらゆらと揺れる燈影が、そこに照らし出した。二人ははじめて、顔を見合せた。

八千代は、否應無しに引きつけられた視線でじつと益夫の顔を眺めた。その瞬間、いかに多くの言葉を、益夫の悲しげな眼が語つたか？ 激しい恥の意識が、八千代を引摺んだ。彼女は灯影にそむくやうにして深くうなじを落した。

『あなたが居無くなつてから、僕はどんなにさがしたかわかりません。でも、會へて僕は嬉しいのです。』

益夫は、胸に亂れる感情の紛糾を捌きかねながら、重苦しい不器用な調子で云つた。

『あなたなら會ふんぢやなかつた——』
と、八千代は喘ぐやうに云つた。

『どうしてそんな事をいふんです？ ぢや、訪ねて來てはいけなかつたんですか。』

『えゝ、いけません。いけません。』

八千代は顔をあげてちらと益夫を見た。その眼はいつぱい溜つた涙の底からむしろ憎惡の表情をも

つてきらめいた。

『ごうしてでせう。』

益夫は悲しげな眼で、それを見迎へた。

『慘酷です。こんな私を見に来るなんて益夫さん、あなたは慘酷です——。私はもう生涯あなたに會はないつもりだつた。私は——八千代はもう死んで了つたんです。今の私は淺ましい生命の脱殻なんです。』

『……………。』

『益夫さん、どうぞ歸つて下さい。私を苦しめないで下さい。そんな眼で私を見ないで下さい。』

八千代は狂氣のやうに云つた。

『八千代さん、歸れといふなら歸ります。だが私は用事があつてあなたを訪ねて來たのです。』

『用事などある筈は御座いません。』

『僕の用事では無い、頼まれて來たのです。——ぜひあなたに一目會ひたいと、會つて呉れるやうに頼んで呉れと、あの幹太郎君が僕に頼んだのです。』

『ほゝゝゝ。あの狂人！』

「狂人かも知れない。あれが狂人ならその狂人にはあなたがしたのです。幹太郎君の苦しみはまったく眼もあてられないのだ。ぜひ一度會つてやつて下さい。」

「いやです。あんな狂人のお對手は御免かうむります。」

と、八千代は顔をそむけてしまつた。

「しばらくの間に本當にあなたは變つて了つた。一體どうしたといふのだらう。」

と、益夫は半ば獨言のやうに云つた。

八千代は益夫の方に斜に後を見せて、卓の上に突伏した。そして嗚咽の聲を嚙みしめた。益夫は嘆息した。

その時無遠慮に障子が引き開けられ、山岸がでつぷりと肥つた大きな身體でぬつと這入つて來た。山岸は、益夫には會釋もしないで、異様な此の場の光景をじろりと見渡すやうにしてから、

「何をしてゐるのだ？ 何を泣いてゐるのだ？」

と八千代に云つた。

八千代は、ついと立つとそのまゝ室を出て行かうとした。

「何處へ行くのだ。お客様を置き放しにして何處へ行くのだ。」

と、山岸はその前に立ちふさがるやうにした。

「歸つて貰つて下さい。私、用は無いんだから——」

涙に亂れる聲でさう云ふと、山岸の袖の下をすりぬけて八千代は室の外へ出て行つた。

「はゝゝ。」

と、山岸は響の無い聲で笑つて、

「また例のヒステリイだ。」

はき出すやうに斯う云つてから、魚の腹のやうな冷たい白眼で、喪心したやうに其處に坐つてゐる、益夫の顔を眺めながら、

「鈴木さんとか云はれたね。八千代にどんな御用だつたんです？」

「お邪魔しました。ぢや僕は失禮します。」

益夫はかう云つて立ちあがつた。

死床の願ひ

惱悶と不攝生とが、再び幹太郎を病床の人にした。遂に八千代に會へずに歸つて來たその夜から、幹太郎は烈しい熱に苦しめられた。五日ばかり急激な熱のさしひきが續いたが、氣管支から肺ををかされて、やがて重い肺炎になつた。意識も昏く高熱にうかされながら、しきりに呼び續けるのは八千代の名であつた。

割合に心臓が強いので三日ばかり燃えるばかりの高熱と殆ど奇蹟的の戦ひを續けたが、衰弱は次第に加はり醫師も回復の覺束なさをひそかに博士に告げた。博士の心痛と懊惱は、目もあてられなかつた。

幹太郎は博士にとつて、決して氣に入りの息子ではなかつた。とは云へ、幹太郎の他に子供といふものを持たない博士の、父としての喜びと悲しみとのすべてが幹太郎の一身にかゝつてゐた。老いた博士の親心を切にし、その悲しい親心が、博士の老いを速かにした。幹太郎の不身持は、いろいろの點から博士を苦しめた。その苦しみが、この二三年の間に、十年にも値する老いを、博士の

身心にもたらした。博士自身の健康も、近頃ひどくすぐれなかつた。それにはまた學界に於ける失意に近い状態も博士の氣力を弱める一素因となつてゐた。博士が半生の努力を以て編みあげた學説は、最近曾ては博士に贅を執つた事のある一少壯學者の創見によつてくつがへされた。博士は、今みじめな淋しい老境に歩み入りつゝあるのであつた。

さうして今や彼の一人息子の幹太郎はまさに死なうとしてゐる。彼の心痛と懊惱とは、云ふも愚であつた。彼は、その枕邊にじつと坐りつゞけた。彼の眼は時々涙の爲めに曇らされた。

『幹太郎。』

彼は瘦せ細つた幹太郎の手を蒲團の下でそつと握りしめながら、じつとその顔をのぞき込んだ。

『しつかりせい。何でもないのでや。しつかりせい。』

彼はかう云つて勵すのであつた。

『おとうさん。』

幹太郎は、熱心にうるんだ眼をあげて父の顔を見上げた。やや熱が引いたかして、思ひ掛けなくもはつきりした意識がそこに呼びもどされてゐる。

『おとうさん。長い間おとうさんを苦しめた事は、どうぞ許して下さい。僕は本當にお父さんにす

まないと思つてゐるのです。——宮子さんには居ますか？ 宮子さんにもお詫びをしなければならぬのです。あの人にも本當に濟まないと思つてゐるのです。』

『宮子は今此處には居ないが——まあ濟むとか濟まんとかそんな事はどうでもいいのだから、早くよくなつて呉れにやあ困る。』

『いゝえ、僕はもう駄目です。僕の肉體にはまだ生きる力が残されてゐるとしても、僕の心にはそれがありません。僕は不出來な人間でした。此の世界に不適當な人間でした。僕は死んだ方が幸福です。僕はちつとも死ぬことを怖れてはゐるのです。』

『そんな事を云うてはいかん。お前はわしの一人より無い息子なのだ。』

博士の眼には涙が溜つた。睫毛に結んだ涙の珠が、皺ふかく瘦せた頬を傳うた。

『お父さん、あなたはやつぱり僕を愛して呉れたのですねえ。僕は今までお父さんに逆らつてばかり居ました。本當に不孝な子でした。どうぞ許して下さい。』

『何故そんな事を云ふのだ。そんな事を云ふ必要は無い。しつかりして早く快くなつて呉れにやあ——』

『いゝえ、もう駄目です。——僕は、お父さんにお願ひがあるのです。』

『何だ？』

と、博士は聞いた。

『八千代さんに會はして下さい。』

幹太郎は一生懸命な願ひをその眼にこめて父の顔を見上げた。

博士は、腕を拱き眼を閉ぢて、胸を嚙む牙の痛みにじつと堪へた。博士の顔は、絶痛絶苦の表情で痛ましく引き歪められた。

『お父さん、僕の最後のたつた一つのお願ひです。』

幹太郎は繰返した。

『幹太郎、お前はそんなにあの女を思つとるのか？』

『あの人は僕の神様です。あの人を一目見る事が出來たなら、僕は靜かに幸福に死んでゆけるでせう。』

『神様だつて？ 馬鹿な。』

『馬鹿かも知れませんが。まったく僕のやうな愚かな戀をしたものはさう、多くは無いでせう。自分の愚かさを今までにもどんなに自分で叱つて見たか知れませんが。叱つてもたしなめても、私の心は』

私の云ふ事をきかないのです。お父さん、あなたのこの馬鹿な息子を憐んで下さい。そして、どうぞこの願ひをきいて下さい。』

『うむう——』

と、博士は苦しく呻くのであつた。

『お父さん、八千代さんの家はわかつてゐます。僕の机の抽出の中に手帖があります。その手帖に書いてあります。』

これだけ云ふと、幹太郎はぐつたりと眼を閉ぢた。再び激しい疲労が、續いて意識をかきくらますところの激しい熱が、おそひ寄せて來た。見開かれたまゝ視點を失つた幹太郎の眼は、やがて重く瞼を合はせられ、半ば開いた唇からは、せはしい力無い呼吸が漏れた。彼は昏々たる眠りに落ちて行つた。そして、その眠りの底から、

『八千代さん！』

と、呼ぶのであつた。

何時の間にか病室にはいつて來てゐた宮子は、音もなく博士の背後に立つてゐたが、その時、思ひつめたやうに、

『をぢ様。』

と博士に呼びかけた。

『おう、宮子か？』

『をぢ様、八千代さんをお呼びでおあげなさいませ。』

『うむ。』

『私からもお願ひ致します。どうぞ、八千代さんをお呼びおあげて下さいませ。』

博士は、返事をせず、額を伏せた。それは、死んで行く愛兒の一期の願ひである。だが、どうして、それが自分の口から云ひ出せよう？ いや、どうして、自分が八千代に會ふ事が出来よう？

宮子、ぢや、お前行つて頼んで見て呉れ、博士はさう云はうとしたが、併し、それが、宮子に對して如何に慘酷な命令であるか？ を思ふと流石にさうは云ひ兼ねた。宮子が幹太郎を愛してゐる事は博士も知つてゐる。斯のあいさうな娘の心は、愛する者の手ひどい裏切で寸斷されてゐるのだ。八千代を呼べ。彼女は血を吐く思ひでそれを云つてゐるのだ。どうして、宮子に、そんな残酷な役目を課する事が出来よう？

『八千代さん！ 八千代さん！』

幹太郎の譎語は、再び繰返された。

宮子は、袂を顔に、壁に倒れかゝつて聲を呑んで泣いた。

灰色の髪のみだれかゝつた博士の額には、苦悶の皺が深く深く刻まれた。それは厳しい精神的拷問だつた。

博士は、もう一度、

『うむう！』

と呻いた。

その夜、益夫が歸つてから、八千代は激しく泣いた。飛びつき度いほどの懐しさ！ その膝に身を投げて聲を放つて泣き度い氣持を強ひて制へて、本心とはまるで反對のあのやうな態度を見せたのも、さうより外に動けない、苦しい心の動きだつたが、しかし、何故もつと素直になれないのだらうと、八千代は自分の妙に片意地な性質が呪はれた。ひとりになると、はじめて素直になれる。素直になれた心で、八千代は小娘のやうに哭いたのであつた。

いつの間にか、荒れ果てしまつた自分が八千代は恐ろしかった。一體、何人が自分をこんなにし

てしまつたか？ —— 何人のせゐでもない。自分のせゐなのだ。自分自身の裏に、『自ら荒らすもの。』が潜んでゐるのだ。それは八千代も承認する。しかし、さうした心の中の悪獸を解き放つたものは一體何人なのだ？

さう思ふ時、彼女は、あの惨酷な功利主義で、女性の心をふみにじつた博士を思ひ出さずにはゐなかつた。さうだ。あの人だ！ 自分のわざはひは皆、清高な學徒の假面に、商人のやうな打算をつゝんだあの岡田博士——その名を思ひ出すさへ忌々しい岡田博士なのだ！ 自分の純潔な處女の愛を裏切り、自分を愛する事の出来ない子供の母とならせたあの男！ おゝ！ あの男なのだ——と、八千代はあの時の憤りと怨みとが、昨日の事のやうにまさ／＼と胸によみがへるのを感じるのであつた。

博士を思ふと共に、必然的に考へられるのは幹太郎の事だつた。幹太郎の可憐な思慕は、上もななく八千代を苦める。それを考へるのは、八千代にとつて堪らない苦痛である。が、博士の子としての位置に幹太郎を置いて考へる時、八千代は惡魔的の微笑が唇邊に湧くのを感じる。幹太郎が、自分故にあのやうに苦しんでゐる。それは、一つの應報、一つの配劑といふものではないか。

しかも、その微笑は長く彼女の唇邊に住まらない。さういふ考へ方も、やがては彼の悲みを、よ

り深くより切ないものとする爲めにしか役立たなかつた。それほど純情の前に、唯、耻ぢをのくより外無いやうな淺ましい自分には何時なつたのか。

が、そんな淺ましい自分にしたのはあの男ではないか？ 自分からすべてを奪つたのは、あの男ではないか？

さう思ふと、彼女の心には再び博士に對する憤りと怨みとが燃えあがるのである。

こんな風な彼女の心は、とりとめもなく思ひ亂れた。そのさま／＼の感情のみだれ合ふ中で、益夫に對するなつかしさだけは、たとへばジャズの燥音の中に、一筋通ふ遠い笛の音色のやうにいつも靜かに、いつもしみ／＼と胸の底に響くのであつた。

しかし、あの人も屹度愛想をつかしたにちがひ無い。あの人の心からも、もう追ひ拂はれてしまつたであらう？

博士が訪ねて來たのは、八千代がそのやうにして果敢なく思ひ沈んでゐる其午後の事であつた。通じられた名刺を見た時八千代はその眼を疑つた。

『どんな人？』と、念の爲めに女中に聞くと、

『六十ばかりの洋服を着た方で御座います。』

さう女中は答へた。

八千代は名刺を見詰めながら、二三分の間殺氣立つたやうな顔でちつと考へ込んで居たが、通すやうに命じると、決然として立上つた。

八千代がはいつて行くと、客間の火鉢の前に、しよんほりと坐つてゐた博士は、おど／＼した眼で八千代を見迎へた。

『いらつしやいませ。』八千代は冷やかに云つた。

『しばらくでしたな。今日は突然お邪魔に出たのだが――』と、博士はやり場に困る眼をせはしくまばたくやうにして、

『早速だがわしはお願ひがあつて來たのです。』

『まあ何で御座いませう。』

八千代はきつと博士を見詰めるやうにした。

『いや、ろく／＼久し振りの御挨拶もせずに、甚だ失禮だが、實は幹太郎が今死にかゝつて居りますのでなあ。』

『まあ。』と、八千代はさすがに驚きの色を見せた。

「それで、あれが是非あなたに會ひたいと云ふのだが、あなた、あれの願ひをかなへてやつては下さらんだらうか。」

「どうして幹太郎さんは私に會ひたいと仰有るんでせうね。」

白々しく云ふ八千代の顔を見ながら、博士は苦痛さうに顔を押し歪めた。

「八千代さん、あれがあなたをどんな風にも想つてゐるか。あなたは御存じぢや無かつたんでせうかな——あれは、あなたでまるで夢中のぢや。こちらへも訪ねて來た事があるさうだが。」と、博士は苦しく言葉を滯らせながら、

「いや、それがあなたにとつてどんなに御迷惑かはわしもわかつとる。で、いろ／＼と云ひ聞かしたのだが、どうしてもあきらめては呉れぬのでな。」

「たつた一言であきらめて頂けさうなものぢや御座いませんか。」八千代はすつかりと切つて落すやうに云つた。

博士はおご／＼として八千代の冷やかな笑ひを帯びた顔を見上げた。

「幹太郎さんが、そんな風に私を思つて下さるのは、私がどんな女であるかを御存じないからです。私の祕密を御存じ無いからです。あなたは何故かう幹太郎さんに云つておあけにならないんです。」

あの女はお前の父によつて處女を失つた女だと。お前の父の子を生んだ女だと。」

博士の顔は死人のやうに青褪めた。

「ほ／＼。幹太郎さんがどんなに物好きでも、さうした私だと知つたらば、きつと愛想をつかさでせう。あなたは何故眞實を語つておやりにならないのです。」

博士はしばらく黙つて居たが、

「八千代さん、だがあれは今死にかゝつて居るのだ。——死にかゝつてゐる者に、そんな慘酷な事は云へん。」

「慘酷でもそれが事實なのぢやありませんか。」

「八千代さん、わしは今、十分罰しられてゐる。わしは、報を受けてゐるのだ。どうぞわしを許して下さい。そして幹太郎の願ひを叶へてやつて下さい。」

「先生。あなたは幹太郎さんの他にもう一人子供があつたのを御存じでせうか？」

「お／＼！」と、博士は重苦しく呻いた。

「でも御安心なさいませ。あの子供は、生れたばかりで死んで了ひました。」

「さうですか。」博士は深く嘆息して、

『何から何まで濟まん事だらけだ。償へるものならわしはどの様にしても償ひたい。八千代さん、わしはどうすればいいのだらう。』

『どうなさればいいか、私にもわかりません。』

『わしはもう償ふことは出来ないだらうか。』

『少し遅すぎる様ですわね。』

八千代はじつと唇を噛みしめて居た。

重い沈黙がしばらくの間続いた。

『ぢや。』と、博士は未練深く、

『どうしてもあなたは来て下さらんのか?』

『はい、それはお断り致します。』

八千代はきつぱりと云つた。

『さうか。どうしても駄目か。』

博士はもう一度嘆息したが、思ひあきらめた様に立上つた。

すこくと歸つて行く博士の後姿を見送つて、八千代は恨みと怒りとに鎖された胸が、一度に

晴れたやうな気がした。報復! 見事にそれを成就したのだといふ気がした。

彼女は大きな聲をあげて笑つて見度かつた。彼女は笑はうとした。だが、どうしたのか、彼女に

は笑へなかつた。反對にわつと泣き度いやうな衝動が續いて起つて來た。

今、自分の名を呼びながら、死んで行かうとしてゐるといふ幹太郎の姿が思ひ描かれた。彼女は

悲しかつた。何も彼もが悲しかつた。遺瀨ない人間の愛慾がひしくと彼女の胸を攻めたので

あつた。

愛する者の道

蹠蹠として幹太郎の病室にはいつて来た岡田博士は、枕もとの椅子にぐつたりと腰をおろすと、膝に肘をつき、身體を二つに折つて両手の間に頭を抱へ込んだ。

「いらしつて下さいますの？」

宮子は傍へよつて来てそつと聞いた。

「……………」

「八千代さんにお會ひになつたのでせう？ え？ をち様。」

宮子は、眠つてゐる病人の氣息をうかゞふやうにして云つた。

「會つた。」

と、博士は呻くやうに云つた。

「ぢや、来て下さるんでせう？」

「いや、あの女は來ない。——あの女は來ない。」

「来て下さらないのですか。」

「あ——」

「幹太郎さんがこんなにお悪い事をよくお話しになつたの？ をち様。こんなにお會ひし度がつて居る事を——」

「話した——。だが、どうしてもあの女は來て呉れんのだ。」

「まあ、どうしてでせう？」

「……………」

「どうしてあの人は來て呉れないんでせう？」

「……………」

博士は返事の代りにもう一度嘆息した。

「ぢや、をち様。私が行つてお願ひして見ますわ。」

「否！ 駄目だ。お前が行つても駄目だ。」

「駄目かも知れませんが、兎に角、行つてお頼みして見ます。林町××番地志賀方——たしかに然うでございましたわね。」

「否！止したがいゝ。止したがいゝ！」
 博士は慌てゝ禁めた。——博士は、何よりも暴露を怖れた。八千代が宮子の前に、自分との關係の一切を暴露して了つたら——？博士は、此の期に及んでも、その不面目を怖れた。
 『をぢ様がいらしつても駄目なのですから、私が行つて駄目なのは判つて居ります。でも、幹太郎さんがこんなに着ひ度がつていらつしやるんですもの。かなはぬ迄も、私、行つてお願ひして見ます。』

「否いや不可い。——あの女に會ふことは止めて呉れ。』

博士は、斯う云つて禁めた。斯う云つて禁める博士の底意が單純な宮子に判らうやうは勿論無かつた。八千代が來て呉れないといふ事が宮子にはさうしても腑に落ち無かつた。自分が行つて頼んだら、八千代は來て呉れぬ事は無からう？——さう思はれるのであつた。

宮子が、博士の目を偷むやうにして、そつと病室を脱けて、八千代の家を訪ねたのは、その日の夜になつてからであつた。宮子は、家を出ると辻車に乗つて、小石川の林町へと走らした。八千代の家を探し當てゝ、その玄關に立つて、八千代への面會を乞うた時、

「奥様は、御病氣でねていらつしやいますので、御氣の毒でございませうが、御目にかゝれないさう

で御座います。』

と、いふ取次の者の返事だつた。

「まあ、御病氣なんでございませうか？——でも、一寸でいゝのでございませう。一寸御目にかゝらして頂けるやう、もう一度御願ひしてみても下さいませ。』

取次の女中は、さう云はれて引返していつたが、少しして出て來ると、再び同じ答へを繰返した。

「どうしても御免かうむらして頂きたいと仰有います。』

「どうしても——？」

と、宮子は思はず嘆息した。駄目だとは思ひ乍らも、此の様に膠も無く斷られようとは宮子は思はず無かつた。冷たい心が恨まれた。こみあけて來る涙が、宮子の臉を熱くした。

「どうぞ、もう一度御願ひしてみても下さいませ。一寸でいゝんですから、せめて御目にかゝらしてだけでも頂けるやう、あなたから御願ひして見て下さいませ。』

宮子は、一生懸命に斯う繰返した。

「でも——」

「どうぞ、御願ひですから——」

女中は、困り切つた顔付をしてその強情な訪問者を眺めて居たが、宮子の頬にほろ／＼とこぼれる涙を見ると、女らしい同情を呼び起されたかして、再び奥へはいつて行つた。が、やがて戻つて來ると、

『どうしても御目に懸れないと仰有います。呉々も悪しからずと仰有つてでございました。本當に御氣の毒でございますけれど——』

と、最後の分は自分自身の言葉として附け添へた。

『ぢや、どうしても會つては下さらないんですか。』

宮子は、絶望の餘よろ／＼と倒れようとする身體を、よろめきかゝつた格子戸で支へながら、袖を顔に當てゝ泣き出してつた。

しかし、何時迄其處で泣いて居るべきでもなかつた。宮子は氣をとり直して、

『どうも失禮致しました。』

と、尋常に挨拶して、格子戸の外へ出た。

そして俯向きがちの一步々々を、悲しく思ひ刻みながら、二三町歩き出した時、ばた／＼と背後に足音がして、今のさつきのあの女中が追ひかけて來た。

『あのう——』

と女中は息せき切つて呼び掛けて、

『御目にかゝるさうで御座います。どうぞ、御戻り下さいます様にとの事で御座います。』

宮子は、女中と共に引返した。

客間に通されてしばらく待つてゐると、八千代がはいつて來た。八千代はひどく蒼ざめて、鬢の毛も亂れ、眼は熱ばんでうるんでゐた。いかにも病床から立ちあがつて來たらしく、病氣で寝てゐたといふのも嘘ではないらしかつた。

『只今はどうも失禮致しました。生憎臥つて居りましたものですから——』

『御病氣のところを種々無理なことばかり申上げて誠に申譯ありません。——私、御願ひがあつて伺つたので御座います。今日を仕様も御伺ひした筈ですが、幹太郎さんがもういけないんで御座います。お医者さんも、もう駄目だといつて居られます。ひどい熱で、讒言にあなたの名をばかり呼んでゐるので御座います。』

『まあ——』

『八千代さん、どうぞ一度あの人に會つてやつて下さいませ。このまゝ死んで了つては、あの人は

あまりお可哀さうでございます。」

宮子は一生懸命に取継るやうに云ふのであつた。

「宮子さん、それをあなたが私にお頼みになるの？」

「あの人があまり御氣の毒なものですから。」

「幹太郎さんは、何か變な夢を見ていらつしやるのですわ。あの人は私がどんな女かつて事を知らないのですわ。」

「幹太郎さんは、八千代さん、あなたを神様のやうに思つてゐるんです。あの人はあなた無しには生きて行けない人だつたんです。長い間あの人はあなたの事ばかり思ひ續けて居たんです。その思ひが、あの人をあんな病氣にしたんです。どうぞ八千代さん、あの人の息のある間に、あの人の眼が見える間に、一度會つてやつて下さいませ。私はそれを御願ひにあがつたので御座います。」

何時の間にかすつかり大人びて、あの子供らしい無邪氣さを深い人間の悲しみに置き換へられた宮子の様子を、しみくと見やる八千代の眼にも靜かに溜る涙があつた。

「行つて御眼にかゝるのはわけはありません。けれども宮子さん、私にはそれが出来ないの。」
「何故で御座いますか？」

「出来ない理由があるの。」

「どんな理由がありますの？」

「それは、私には云へません。——幹太郎さんは思ひ違へをしていらつしやるのです。宮子さんの様な心も身體も美しい、こんな娘さんが傍にゐるのに。」

「……………」

「宮子さん、あなたの口からそんな御頼みを聞かされるのは私たまらなく辛いよ。宮子さん、あなたはどうして私を憎んでは呉れないのです。いゝえ、あなたの愛を裏切つたあの幹太郎さんを憎まうとはなさないのです。あの人は、まるで玉を瓦に換へようとしてゐるのです。」

「いゝえ。いゝえ。そんな事はありません。あなたを憎むなんて、どうしてそんな事が出来ませう？ それは悲しい事では御座いますけれども、私はその爲めに幹太郎さんを恨まうとも思ひませぬ。いゝえ、恨んだ事もあるにはありました。でも、今は仕方がないとあきらめて居ります。今は唯、あの氣の毒な人の、せめて最後の願ひをだけでも、叶へてあげたいと思ふばかりでございます。あの人は本當にひどく苦んだのです。その苦しみの爲めに、あの人は死んで行くのです。今のあの人はあなたの名を呼び乍ら、あなたの來るのを待つてゐるのです。どうぞ行つてあの人に逢つ

てあげて下さいませ。』

『宮子さん、あなたはそんなに迄あの人の事を思つてゐるんですか。』

と、八千代は嘆息と共に云つた。こゝに誠に愛する者の道がある。人を愛するの道は、誠にかうなくてはならない筈だ。八千代は、踏み迷した自分の足跡を顧みて、今更のやうに悔いの蠟に胸を噛まれるのであつた。

『どうぞ八千代さん、私と一緒にいらしつて下さいませ。あの人は待つてゐるのです。』

宮子は更に斯う繰返した。

八千代はしばらく考へてゐたが、やがて思ひ決したやうに、

『ぢや参りませう！』

と、云つた。

今日博士が歸つたあとで、八千代は腦貧血の爲めに倒れたのである。まだ少し眩暈がする。ともすれば、くら／＼と眼前が昏くなつて前にのめりさうな氣がする。が、八千代は勇氣を激まして立ちあがつた。青ざめた顔に少しばかりの白粉を刷き、簡単に着替へをすますと、宮子と共に、タクシーを命じて幹太郎の病床へと急いだ。

幹太郎の病勢は、もう死の一つ手前にまでのほりつめてゐた。呼吸は迫つて、一息毎に苦しく喘ぎ、激しい熱はぢり／＼と彼の命の緒を焼き切りつゝあつた。唯、異常に強い心臓が、その間際で死を喰ひ止めてゐた。

『奇蹟だ。普通の人ならば、もう疾うにいけなな筈なのだが——』

と、主治醫の博士はつぶやいた。異常に強い心臓の力——而して、それは愛の力では無かつたか？ 愛する人の姿を一目見ない。ちは、愛する人の聲を一聲、聞かないうちは、幹太郎はどうしても死ねないのだつた。彼は、時々、眼をみひらいて、枕元を掻き探るやうにした。

『八千代さん！ 八千代さん！』

彼の讒言は繰返された。——この聲は、ひしひしと父博士の胸に 砒を打つのであつた。

『をぢ様！』

と、轉ぶやうに病室へはひつて來た宮子が、その悲しい喜びに思はず聲を躍らしながら、枕もとに腰をおろしてゐる博士の膝にとりすがるやうにしたのは、その夜ももう十時を過ぎてからであつた。

『八千代さんがいらしつて下さつてよ。』

「何？ 八千代さんが来て呉れた？」
博士も、聲を弾ました。

「来て下さいました。今こゝへいらつしやいます。」

宮子は言葉忙しく云ひながら、眼は病人の方に凝いで、

「大丈夫ね。未だ？ 未だ間に合つたのね。」

「うむ。」

博士は扉の方へ眼をやつた。看護婦が先にはひつて来た。看護婦は、入口のところで振返つて、

「どうぞ——」

と云つた。が、あとに續いた人の姿は、ちらと扉の隙間にちらついたと思ふと、それなり、壁の蔭に隠れてしまつた。——八千代の足はそこでぴたりと動かなくなつて了つたのである。彼女は唇を嚙んで、わななくとふるへてゐた。

「どうぞ——」

看護婦はもう一度うながした。

宮子は入口に走り寄つて、

「どうぞ、此方へおはいり下さい。」
と云つた。

八千代は、静かにはいつて来た。病人の爲めに光力の弱められてゐる照明で、幽暗な空氣の重く沈んでゐる病室の内に、青ざめた八千代の姿は、魂だけの人かなぞのやうに見えた。

「よく来て下さつた。ありがたう！」
と博士は頭を下げた。

八千代は、それには答へずに、静かに幹太郎の枕もとに歩み寄つた。——醫師達は其時皆隣控室の方にゐたので、病人の枕もとには、宮子と博士との外には何人もゐなかつた。看護婦は、室の隅の方に黙つて立つてゐた。

病人は、深い昏睡に落ちてゐた。八千代はその寝顔の上にかがみかゝるやうにして、じつと、全く相變りのした病人の顔をのぞき込むやうにした。

「幹太郎さん！ 幹太郎さん！」

と、宮子が小さく呼んだ。

すると、病人はほつかりと眼をみひらいた。

『八千代さんですよ。八千代さんが来て下すつたんですよ。』

宮子は涙にわななく聲で云つた。

幹太郎の眼の裡に、さつと閃めくものがあつた。

『八千代さん!』

彼は、しかし、譫言めいた聲で叫んだ。

『幹太郎さん。』

八千代は、辛うじて一と聲斯う呼んだ。

幹太郎の力無い視線は、それが幻影であるか實在であるかを見判け兼ねるといふやうに、しばらくの間じつと八千代の顔に凝らされてゐたが、さう呼びかけられると、再びはつと底からの生氣を動かした。而して、きら／＼と燃えあがつた。

『八千代さんが来て下すつたのですよ。八千代さんですよ。』

宮子が繰返した。

『あゝ、あゝ——』

と、幹太郎は呻くとも喘ぐともつかぬ聲で二言ばかり云つた。而して、激しく身をもだえながら

蒲團をはねのけて、床の上に起きあがらうとした。

その肉體に残された最後の力を振絞つて、辛うじてさしのばした両手に、八千代は、自分の両手を與へた。

『八千代さん! 八千代さん!』

幹太郎は、はつきりした聲で云つた。而して、燃える眼でじつと八千代の顔を眺めた。

『……………』

八千代は、しかし、その幹太郎の眼を見迎へるに堪へなかつた。知死期の苦痛を乗り越えたよろこびを以て、あこがれ渡り慕ひ寄り、その一瞥に不死の愛を掴んで今や死に行かうとする眼眸の前に、八千代の心は唯わな／＼とふるへるばかりであつた。

しつかりと八千代の両手を握つた幹太郎の手からは次第に力が失はれた。その眼は、やがて閉ぢられ、その身體はやがて床に沈み、さうして、再び深い昏睡状態に落ちたが、と思ふと間もなく、最後の痙攣が、彼の五體に襲ひかゝつて來た。

醫師がはひつて來た。

もういけなかつた。

博士は黙然としてその枕もとに立つた。八千代も、じつと幹太郎の死顔を見つめて、石像のやうに動かなかつたが、急に、しんを抜かれたやうに寢臺の傍に崩折れると、床に半身を投げつけるやうにして、

「幹太郎さん。あなたは間違へてゐた。間違へてゐた。」
と物狂はしく叫んだ。

「私はそんな女ぢやあ無い。わたしは濟まない。私は、何と云つてあなたに申わけをしていゝか判らない。」

醫師も、看護婦も、呆氣にとられたやうに八千代の姿をうちまもつてゐた。

突然、もう一つの嗚咽の聲が迸つた。——見ると、宮子が椅子の上に倒れかゝつて肩をふるはして泣き出したのであつた。

斯うして幹太郎は死んだ。

幹太郎の葬式が営まれたのは、年ももう押迫つてからであつた。たつた一人の愛兒を失つた博士の悲み——その悲みは、單なる悲みでは無かつた。一人の愛兒を斯迄の懊惱のうちに死なしめた責めが自分にある事の自覺で、博士がどんなに苦んだか？ 告別式に來た人達は、博士の、恰も「荒

野のリア王』と云つた姿で、いたましく老い衰へてゐる様におどろかされた。

眼を泣き膨らした宮子の可憐な姿も、人々の涙を誘うた。——參列者のうちには、辻益夫の憂鬱な顔も見られたが、しかし、八千代の姿は見られなかつた。

「えゝ。屹度來て下さるつて私に約束して下さつたのですけど——」

宮子は、斯う益夫に語つて八千代の不參をいぶかしんだ。

とうく、八千代は來なかつた。

秘めたるまゝに

宮子が、八千代の家を訪ねたのは、葬式が済んでから三日目、風の吹く埃つほい日であつた。電車を捨ててしばらく行つてその見覚えの横町を曲つた時、むかうから俯向勝ちに歩いて来る黒い外套の男があつた。近づいて見ると、それは辻益夫であつた。

「あら辻さん。」

宮子は呼びかけた。

「やあ、宮子さんですか？」

益夫は深い黙想の中から面を上げて、

「どちらへ？」

と訊いた。

「あの、八千代さんをおたづねしようと思つて——」

「八千代さんなら、實は、僕も今たづねたんです。あの人は、居ませんよ。」

「いらつしやらない？ 今日はお留守なんですか？」

「あの人は、十五日の晩に、あなたと御一緒にあの家を出たきり、まだ歸つて来ないんださうですよ。」

「あれきり、お歸りにならないんですか？」

「どうも、さうらしいんです。」

「まあ、どうしたと云ふんでせう？」

宮子も深い失望の色をあらはした。

「どうしたのか僕にもわかりません。」

「あなたのところへは、何のお消息もないんでございますか。」

「ありません。——あの人は、また何處かへ身を隠したのでせう。あの人にはどうも種々の秘密があるらしいのですよ。」

二人は、雀色の黄昏の中で、寒い風に吹かれながら暫くの間顔を見合せて居たが、

「ぢや、おたづねしても仕方が無いのね。」

と宮子が云つた。

「歸りませう、そこまで御一緒にまゐりませう。」

益夫が先に歩き出した。二人は、黙々としてうなだれ勝ちに歩いて行つた。

「宮子さん？」

益夫はしばらくしてから口を切つた。

「は？」

「あなたは、八千代さんを恨んではいらつしやいませんか？」

「いゝえ。」

宮子の返事はかすかだつた。

「恨んではいらつしやらないのですか？」

「えゝ。——何も彼も仕方が無い事だつたとあきらめて居るので御座います。」

「あきらめて？——然う、それより外に仕方がありませんからね。」

やさしく云ひながら、益夫は宮子の顔を覗き込むやうにした。宮子の眼にはしかし涙が一ぱいだ

つた。

益夫は肴町の停留場で、宮子と別れて降りた。

家に歸つた時はもう夜だつた。小夜子は、湯上りの頬を仄白く匂はして、玄關に Outreach へた。着換へをすまして、茶の間の長火鉢の向ふに坐つた益夫は、小夜子が、今日は珍らしく丸鬚に結つてゐるのに眼をとめると、

「よく似合ふね。」

と云つた。

小夜子は、ほつと顔を赤くしてうつむいた。いつまで経つても、小夜子は娘々した羞恥を失はぬ女であつた。

「お前には矢張その髪がいゝ。だが、随分重さうだね。どの位目方があるものだらうな？ 五百目ぐらゐはあるかな。」

「まあ。そんなに——」

「そんなに重くはないかな。はゝゝ。だが、そいつを一日頭に載つけてゐたら、随分くたびれるだらうな。」

「まあ——」

小夜子は再び赤くなつた。

「何だか頸が折れさうだよ。」

「まあ！」

「はゝゝ。まさか折れはしはしないだらうね。」

益夫は機嫌好く笑つた。——だが、然うした益夫の笑ひが、如何に空虚なものであるかと云ふ事を小夜子は知つてゐた。益夫は、苦んでゐる時、惱んでゐる時、却てそんな風に重い口で無理に拙い輕口を云つたりして、機嫌好ささうに笑つて見せるのである。それを知つてゐる小夜子は、唯、悲しげな眼を以て夫の笑ひに酬いる外無いのであつた。

「馬鹿に寒いね。——小夜子。ウキスキイを一口やり度いんだがね。」

益夫は遠慮ツほく云つた。

益夫の前には、小さい杯と角瓶のウキスキイとが置かれた。

「大丈夫だよ。酔やしないから——。赤くはなつても酔やしないんだ。」

益夫は、そんな事を云ひながら、二つ三つウキスキイの杯を明けた。酔やしないと云ひながら、酒に弱い益夫は、やがて、眼前がちらつく程酔つて來た。

「小夜子。どうしてお前はそんな淋しさうな顔ばかりしてゐるんだらうな。え！ 矢張、僕がたよ

りにならない氣がするの？」

「いゝえ。」

「ね。淋しがらないでもいゝんだよ。僕は、どんなにお前を愛してゐるか知れやしないんだ。ねえ小夜子は、僕が外の女を、あの八千代といふ女を愛してゐると思つてゐるんだらう？ うそだよ。そんな事は——。僕はあんな女些とも愛してなんかゐやしないんだ。」

「……………」
不意にそんな事を云ひ出したので、小夜子は狼狽して、おど／＼と遣り場の無い眼をさまよはした。

「あんな女、何とも思つてやしないんだ。あの女はもう墮落してしまつたんだ！ はゝゝ私生兒を産んだりするやうなしだらくな女を、どうしておれが愛しなんかするものか？」

「……………」

「ね、小夜子。お前がそんな淋しさうな顔をしてゐるとおれは悲しくなるよ。もつと元氣になつて呉れ。ね、僕はお前の外何人の事だつて思つてやしないんだ。」

酔ひが彼の感傷をそゝつた。而して、その感傷的な愛撫の言葉は、酔ひが云はせるのだとは承知

しながらも、そんな風に云はれると小夜子も無上に悲しくなるのであつた。小夜子のうつむけた頬をほろ／＼と涙が傳うた。

「おや、小夜子。泣いてゐるのかい？ をかしいなあ。どうして小夜子はさう泣蟲なのだらうなあ。」

益夫は笑ひながら云つたが、さういふ益夫の眼にも涙が一ぱいだつた。益夫は、その涙を見られまい爲めに、ごろりとそこに横になつてしまつた。

「あの女は又、何處かへ行つてしまつたんだよ。丁度いゝんだ。はゝゝ！ それで却て薩張したといふもんだ。」

益夫は獨言のやうにさう云つた。そして、

「はゝゝ！」

と、もう一度笑つた。

戸外は激しい風だつた。小夜子はふと聞耳を立てた。風の音にまぎれた、入口のあたりに何か物の氣配がする。

「御免下さう。」

さういふ聲がする。小夜子はいと立つて玄關に出て見た。格子戸の外は風を含んだ闇の蠢きを見るばかり、何人もそこにはゐなかつた。空耳だつたか知ら？ 小夜子は、そのまゝ、座敷に戻つた。

座敷に戻ると、益夫は半身を起して、眼を空に睜つてゐた。

「何人か來たの？」

と益夫は訊いた。

「いゝえ。——そんな氣がしたので出て見ましたけれど——」

「何人も來たんぢや無いんですか？」

「えゝ。」

益夫は、尙ほ少時の間聽耳を立てゝゐたが、ふと何かに衝き動かされた様にして立ちあがると、慌たゞしく玄關の方に出た。而して、下駄を突っかけると、格子戸を明けて戸外へ出て見た。——が、たゞ、街燈の燈がほつりほつりと闇を切りぬいてゐるばかり、その横町の右を見ても左を見ても、人影一つ見えなかつた。

その時、その横町を出たもう一つの横町の板塀續きの暗い片蔭を、黒いシヨオルで顔の半ばを掩

うた一人の女が、泣き濡れた頬を、外燈の餘照に青白く浮べながら、足もともたどくしく廣い通りの方へ歩いてゐた。

『さうだわ。未練といふものだわ。今更、あの人に會つたつて唯、お互ひを苦め合ふばかりだわ。』

— それにあの平和な家庭を亂してはならないわ。私は矢張、此のまゝ行つてしまはう。』

その女は— 八千代は、斯う心の中でつぶやいた。

それから一時間ばかりの後、八千代の姿は上野發の北行の列車の二等室の片隅に見られた。黒いシヨオルに青白い顔— 眼は力強く閉ぢられて、睫毛の影を下瞼に刷いて、寂然として身動きもしなかつた。が、時々、小刻みに肩を揺つて身ぶるひをした。彼女の身體は、高い熱で燃えてゐた。

益夫は、もう八千代を求めようとはしなかつた。どうしたのだらう？ 何處にどうしてゐるので

あらう？ と、日夜、案じ続け思ひ續けながらも、もう、八千代を探さうとはしなかつた。

あの人は云つた！ もう、永久に自分の生活の圏外に去つて了つた—

益夫は、斯う考へて嘆息した。

どうかすると、八千代の夢を見る事があつた。

八千代さん！ 夢の中で斯う呼んで、自分の聲に驚いて眼を覚ます事などがあつた。

しかし、益夫はつとめて八千代を心の外に置かうとした。仕方が無い。あの女が何うならうと、それがあの女の運命なら仕方が無い。益夫はつとめて斯う思はうとした。が、若し自分が勇氣を以て愛し得たなら— と思ふと、八千代の運命を狂はした半ばの責任が自分にある事を考へずにはゐられなかつた。而して何處かで、八千代が自分を呼んでゐるやうに思はれてならなかつた。

おゝ！ 何も彼も愚かな！— 益夫は、それ等の物思ひを、撚り捨て撚り捨てた。

而して一月が過ぎ二月が過ぎて、三月の初めのある日の事であつた。一通の電報が配達された。

ヤチヨキトクスグオイデマツ

さう電報には記されてゐた。差出人の名はハシモトとあつた。仙臺市×町二〇三番地とその住所も電文に附け添へられてあつた。ハシモト？ 江戸川の方にゐた八千代の友達の橋本千恵子の名

がすぐに思ひ浮べられた。ではあの人が、多分その郷里である仙臺へ歸つてゐて、八千代もそこへ便つてゐたのか？ それにしても危篤とは？ 益夫はすつかり動揺してしまつた。

『すぐいらつしやらなければいけませんわ。』

小夜子は甲斐々々しく、益夫の爲めに旅の支度を整へた。益夫は、その夜の急行で、上野を發つ

たが、汽車へ乗つてからも何が何だかまるで夢中であつた。八千代危篤。何と云ふ突然なあまりに突然過ぎる此の報知であらう？

あくる朝、仙臺に着いた益夫は、驛からすぐに自動車に命じて、その町へ、その番地へと走らした。

案の通り、それは橋本千恵子の家だつた。青葉城を真面に見る公園の近くの、士族町の名残を見せた一廓に、家の構へも賤しげではなかつた。

刺を通じると、六十ばかりの老主婦が出て来た。それが千恵子の母親であることは面ざしの似通うてゐることで知られた。

「電報を頂いてまゐりましたんですが。千恵子さんはいらつしやいますか。」
益夫は騒ぎ立つ胸を押鎮めて云つた。

「お。塙さんの——？ 東京からの——？」
と、老主婦は聲を弾まして、

「千恵子は、病院の方に行つて居ります。病院は直ぐ傍でございます。ようこそまあ——早く行つておあけなされませ。昨夜からもう待ちぬいて居られますよ。」

「病人はひどく悪いんでせうか？」

「早く！ 早く行つておあけなされませ。」

老主婦は急ぎ立てるやうに云つて、運轉手に病院の所在を教へた。

病院は其處から一町とは離れてゐなかつた。病院と云つても普通の町醫者が診察室の隣りに二つ三つの病室を用意してゐるといふ程度のものでつた。門前で車を乗り捨て、玄關の柱の呼鈴鈕を押すと、急ぎ足で其處へ出て来たのは、東京で面識のある千恵子であつた。

「来て下さいましたのね、——あと、もう少しお早やかつたら。」

千恵子は、益夫の顔を見ると、急にこみあげて来たといふ風に、はらくと涙を落した。

「ぢや、もういけないんですか？」

益夫は、茫然として突立つた。

「お呼びするのが遅過ぎたんです。もう一時間。いえ、もう三十分早かつたら——」

千恵子は、入口の扉に倒れかゝるやうにして云つた。

では、もういけなかつたのか？ あの人死んで了つたといふのか？——益夫は、ぐわんと頭を打たれたやうな氣がした。そしてそのまゝ其處にのめり倒れて了ひさうになつた。

が、最後の勇氣が辛うじて彼を支へた。彼はわななく指先で靴の紐を解き、却て千恵子を促すやうにして、二階の病室にあがつて行つた。

疊敷きの六疊ばかりの病室の、壁際に据ゑられた寢床には、息を引取つてから未だ三十分は経たない八千代が、白い敷布に黒髪の亂れを見せて、仰臥して居た。寢床を圍んで二人の看護婦と、一人の中年の婦人とが、嚴肅な死の雰圍氣に息づまされたやうにして、黙然として坐つてゐた。

益夫は、それ等の人々に一揮して、つかつかと枕元に歩み寄ると、面帕を取り除けて、ちつと八千代の死顔を眺めた。

『八千代さん、八千代さん。』

彼は、心のなかで叫んだ。茫然たる悲しみが彼の胸に衝きあげて來た。若し人目が無かつたならば、彼は八千代の死骸に抱きついて心ゆくばかり慟哭の聲を放つたであらう。彼はせぐり來る涙を噛みしめ乍ら、わななくと慄へる手で寢床の縁を握つた。

看護婦達やもう一人の婦人は、そつと座をはずした。千恵子と二人きりになつた時、益夫はやうやく我に歸つて千恵子に云つた。

『千恵子さん、僕には何が何だかさつぱり解らないんです。一體、何時から八千代さんは此處へ來

て居たのでせう？』

『去年の暮、もうあと十日ばかりに押つまつてからで御座いました。突然此處へ御見えになつたのです。もつとも、いらつしやるやうにとは、秋、私がこちらへ引込むやうになつた時にもお誘ひして置いたのですが。』

『どういふつもりで此處へやつて來たのでせうねえ。』

『他に頼る處が無いから——それに、落着いた眞面目な生活にはいらいたいからと仰有つて下さいました。私の父が關係して居ります女學校に就職口が定りまして、來學期から出る事になつてをうたのでございますが——』

『あゝ、さうですか。僕はちつとも知りませんでした。何一言、僕には知らせないものですから——。で、何時から病氣になつたのでせう。病氣は何の病氣だつたのでせう？』

と、益夫は死顔の方に眼をやりながら云つた。面帕の端から白玉を刻んだやうな額の一部がちらと見えた。

『こちらにいらしつてから、ずつと御病氣勝ちで、兎角元氣がお勝れなさいませんでした。それに八千代さんは、ひどく苦んでいらしつたやうでございます。私は、女學校時代からのお友達でござ

いますけれども、近頃の八千代さんはまるで別人のやうで御座いました。あんな快活なほがらかな方が、ひどく憂鬱におなりになつて、何か考へ込んでばかり居らつしやいましたの。』

『うむ。』

と、益夫はうめくやうに云つて強く唇を嚙んだ。

『辻さん、八千代さんが何をそんなに苦しんでいらしたか、あなたも御存じないことは無いでせう。』

『……………』

『勝氣な方でしたから、はつきりさうとは仰有いませんでしたけれども、私には八千代さんの御心持が今になつてからよく判るやうな氣がするので御座います。』

『ですが、どうしてもつと早く僕を呼んでは呉れなかつたのでせう。』

『貴方の御住所を、八千代さんはどうしても云つて下さらなかつたのです。お呼びしますから教へて下さいと何遍云つて見たか判りませんが、いゝえ會はない、もうあの人には會はないのだとばかり仰有つて、どうしても貴方のお所を教へて下さらなかつたので御座いますよ。』

『さうですか！』

益夫は再び嘆息した。

『床にお就きになつたのは先月の末、どつとお悪くなつたのは四日ばかり前からでした。御病氣は肺炎でしたが、もう早く死んだ方がいゝのだなどと仰有つて——』

こゝまで云つて来て千恵子は一段聲を落して、

『未だそんなにお悪くならないうちの事で御座いました。八千代さんの枕の下から、妙な小さな瓶を私が見つけた事がありました。それは怖ろしい毒藥だつたので御座います。』

『毒藥？ ぢや、八千代さんは毒を嚙んだのですか？』

『いゝえ。おのみになりはしませんでした。私がそつと取上げてしまひましたから——。でも、そんなものを用意してゐたところを見ると、自殺の覺悟もなすつたのだらうと思ふので御座います。』

『そんなに——そんなに苦んでゐたんですか？』

『私は、丁度同じやうにある人を苦めた事がある。苦み死に、死なせた事がある。だから自分で苦むのは仕方がない。償ひなのだ。酬いなのだ。そんな風に八千代さんは云つて居られました。——でも、愈々、いけないと自分でわかると、さうで御座います。昨日の午後三時頃の事で御座います。急に、今までかくしてゐたあなたの御住所を云つて、お呼びしてくれと仰有るので御座いま

す。もう、息のあるうちにはお眼にかゝれまいけれど、死んでからの事もあるし、せめて死顔でも見て頂き度いと仰有つて——で、すぐに電報をおうちしたのですが、矢張とう／＼間に合ひませんでした。』

千恵子の頬には再び涙が傳うた。

『ぢや、ほんの一寸の事で間に合はなかつたんですね。』

『ええ。三十分か、せい／＼四十分のところでした。』

『……………』

『本當に、八千代さんのやうな方がこんな事になるなんて、全く人間といふものは判らないもので御座います。女學校時代のお友達の中でも、御容貌なり、頭腦なり、何から何まで皆揃つて、どんな素晴らしい幸福でも、八千代さんに過ぎた幸福は無からうと思はれてゐたものなのです。』

千恵子は感慨に堪へぬものゝやうに云つたが、

『一體どうしてこんな事になつたのでございませう？』

と、やゝ詰るやうな表情を見せて益夫に訊いた。

『いろ／＼理由があるのですが、しかし、私もこの人の全部を知つてゐるのぢやあ無いのです。私にも判らない秘密があつたやうです』 益夫は、あの子供の事を思ひ出しながら云つた。

『然うで御座いますか？』

千恵子は胸に落ちなささうな顔附だつた。

益夫は、もう一度枕もとに歩み寄ると、面帕をのけて、その死顔を覗き込んだ。やつれは見えるが、珠を刻んだやうな美しい死顔だつた。永久に開かれぬ眼、永久に開かれぬ唇——しかしその唇はかう力強く呼びかけてゐた。

『益夫さん！ 私はあなたを愛してゐたのよ。私が愛してゐたのは、あなたの外に無かつたのよ。』

——私はあなたを愛してゐたのよ！』

益夫は思はずその死顔の上に屈みかゝり、その冷たい顔の上に唇をさしよせた。而して彼女が生きてゐるうちに、とう／＼彼女に向つて云ふ事の出来なかつた言葉を、心の中に繰返した。

『八千代さん。僕もあなたを愛してゐたのだ。あなたを愛してゐたのだ。』

三月の聲は聞いても、此方の天は未だ春には遠かつた。硝子窓がさら／＼と鳴り出したのに氣がついて見ると、細かい雪がちら／＼と降つてゐた。

愛染草 (終)

昭和二年四月十二日印刷
昭和二年四月十日發行
昭和二年四月二十日八版發行

定價金貳圓五拾錢

(愛染草奥附)

不許複製



著者	加藤武雄
發行者	東京市本郷區駒込坂下町四十八番地 野間清治
印刷者	東京市神田區松下町七番地 佐藤磨
印刷所	東京市神田區松下町七番地 明治印刷株式會社

發行所

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地

大日本雄辯會

電話 振替口座東京三九三〇
小石川 三二一五 五九六一 五九八一 七〇八八

加藤武雄先生最近の力作

版四十

審判

判

暴力を以て汚された處女の、呪はれたる胎に生を得た彼が、如何にしてその母に選り合ったか。子を捨てた母と、母を悶死せしめた子とが如何に深刻なる心の戦ひを戦つたか。兄と知らず、妹と知らずして、彼と彼女とは如何に悲しい戀を戀したか。某修道院の一青年の告白を材とせる運命悲劇、一讀何人も巻を掩ふて哭くであらう。

天才的音楽家まり子が洋行する別れの演奏會の當日、其の聴衆の中からピアノの伴奏をしたといふ者を誰かと見れば大音楽家内山老人である。曲は君よ知るや南の國！聴衆は感に入つて誰一人咳一つする者が無い。然るにハタとピアノは止み老人は仆れた。……かねて亡くなつたまり子の父母は音楽家、而も熱愛したこの君よ知るや南の國！……小説壇の第一人者たる加藤先生が「私の最善を盡し最高の藝術的良心を致した」といふ傑作である。

版八十

君よ知るや南の國

四六判絹布裝
美麗口繪挿繪入
定價壹圓八拾錢
送料八錢

伊東深水畫伯裝幀
四六判函入
黑羽二重瀟酒
定價貳圓五拾錢
送料拾貳錢

(行發會辦雄本日大)

● 女人群像

容貌美しく心崇高き一女性の奇な運命を叙し、切實なる各種婦人問題の眞髓を描く。新文壇王と迄云はる著者の代表的傑作。

中 武羅村 著

四六判函入美裝
定價貳圓五拾錢
送料各十二錢

● 夜の潮

類廢糜爛せる肉慾生活の中から次第に眼覺めゆく靈性の曙を描ける名篇。某上流家庭に起つた戀愛事件を題材としてモデル問題逆起した長篇小説。

中 武羅村 著

四六判函入美裝
定價貳圓七十錢
送料十二錢

● 處女

現實世界に清く生き、人生の花の下に安らかに眠つた處女の生涯を描き、幾多婦人問題を具現し、處女神聖の讚歌を捧げた靈感的名作。

中 武羅村 著

四六判函入美裝
定價貳圓卅錢
送料十二錢

● 沈む夕陽

職業婦人を題材として、恐るべき世相の裏面を剔抉し、虛榮に燃ゆる若き女性に一大衝動を與ふ。近來稀に見る傑作。

長 幹彦 著

四六判函入美裝
定價貳圓五十錢
送料十二錢

● 波のうへ

文豪長田幹彦先生が宿望を達せられたといふ會心の傑作。紅燈の巷にありし一女性を題材として波瀾極まりなき運命の幾變轉を描く。

長 幹彦 著

四六判函入美裝
定價貳圓卅錢
送料十二錢

● 悲みの極み

才貌兼備の少壯教諭と美しき二人の女性にまつはる戀愛葛藤を描く。性格の相違、戀愛葛藤の變轉に悩む者に解決の鍵を與ふる空前の名作。

沖野 岩三郎 著

四六判函入美裝
定價貳圓五十錢
送料十二錢

發行所 東京本 日本雄辯會 振替 東京三〇九

◎女 王

復讐と戀愛の十字路に描む
の狂ふ見よ！女王銀子
がそ描む
武羅村著
四六判函入羽二重装
送料十二錢

◎君は燃えたり火如く

名にし負ふ天下の他見男
しめ再讀する所に笑の彈丸
を爆發せしむ
他見男著
四六判函入
送料十錢

◎樂園の扉

如何にすれば人生樂園の扉
は開き得るであらうか
は赤裸々に描き盡さる
相見
藤著
四六判函入絹布装
送料十二錢

◎幸福物語

世の荒波にもまれて有ゆる
辛酸なめ、あらゆる誘惑
と闘ひ、遂に清らかなる戀
を描く、萬人必讀の良書
藤著
四六判函入羽二重装
送料十二錢

◎春の流

天下斯の如く濃艶にして斯
語は稀なり、婉を極め、戀
悟得せんとする者は讀め
紅佐藤著
四六判函入羽二重装
送料十錢

◎第一歩

加藤武雄先生は激賞して曰
ふ「近來の續き物の中で最
も注目すべき作だ漱石の坊
ちゃんなどと思はせる」と
紅佐藤著
四六判函入美装
送料十二錢

◎江戸お洒落狂女

江戸の花と謳はれ幾多奇々
怪々事件を捲起した狂女
からヤンヤと騒がれた女
！真に優艶悲壯波瀾萬丈！
美本禪田著
四六判函入
前篇壹圓八十錢
中篇貳圓五十錢
後篇貳圓五十錢

◎江戸情話 亂れ焼刃

享保後の大江戸を背景とし
て描ける歴史小説境稀有の
大傑作。宛ら繪巻物を繰る
如き真に稀に見る長篇
美本禪田著
四六判函入
送料十錢

◎幕末傳奇 復讐雙

著者が最も得意とせる幕末
時代を背景に大膽不敵の大
英雄が震天動地の復讐！大
な描ける會心の作
曙前山田著
四六判美装函入
送料貳圓

◎幕末巷談 糸の亂

明治維新の戦亂を背景とし
て描ける一大情史。構想とし
雄大。優艶なる筆致、一讀
三嘆真に驚くべき大傑作
曙前山田著
四六判美装函入
送料貳圓貳十錢

◎劍俠悲願千人斬

全篇到るところに劍光閃め
きて血痕斑々、脂粉の香籠
郁として忽ち紅涙流下す
悲絶慘を極めて波瀾重疊
悦下村著
四六判函入春絹袖
送料貳圓四十錢

◎俠客神髓 妙法院勘八

男の中の男と謳はれながら不
幸今日にその名傳はらざりし
勘八のために文壇の巨擘浪六
先生が心血を傾けたる大傑作
浪村上著
四六判布裝函入
送料貳圓廿錢

著名の朽不るた々噴評好！よ見

支那文學概論講話	教育道	日本膨脹論	政界側面史	進化と思想	煩悶の自由	壇上紙上街上の人物	思想山水人物	南洋遊記	花袋行脚	異國行脚	二人行脚
文學博士 鹽谷 溫先生著	文學博士 安藝愛山先生著	子爵 後藤新平閣下著	林田龜太郎先生著	松村松平先生著	理學博士 丘淺次郎先生著	理學博士 鶴見祐輔先生著	理學博士 鶴見祐輔先生著	田山花袋先生著	理學博士 口下部四郎太著	理學博士 口下部四郎太著	理學博士 口下部四郎太著
菊判函入	菊判函入	洋判函入	布判函入	菊判函入	洋判函入	菊判函入	菊判函入	菊判函入	菊判函入	菊判函入	菊判函入
送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢	送料十八錢
定價五圓	定價五圓	定價五圓	定價五圓	定價五圓	定價五圓	定價五圓	定價五圓	定價五圓	定價五圓	定價五圓	定價五圓

—行發(京東替振)社談講・會辯雄本日大—

著名の讚賞狂熱君諸女少年少

美文集志ら	ハモニカ樂譜	ハモニカ奏法	算術自修書	探偵事實奇譚	探偵十種	物語史 血戰記	物語寇 八幡船	奇譚 龍神丸	海賊 露草の握	涙の握	君よ知るや南の國
文學博士 中村孝也先生著	宮田東峰先生編	宮田東峰先生著	寺本清一先生著	筑波四郎先生著	筑波四郎先生著	川島堰一郎先生著	管川臨風先生著	文學博士 高垣 眸先生著	南部修太郎先生著	水守龜之助先生著	加藤武雄先生著
布判函入	菊判函入	菊判函入	洋判函入	洋判函入	洋判函入	美判函入	美判函入	美判函入	美判函入	美判函入	極美判入
送料十錢	送料十錢	送料十錢	送料十錢	送料十錢	送料十錢	送料十錢	送料十錢	送料十錢	送料十錢	送料十錢	送料十錢
定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓二十錢	定價一圓八十錢

—行發(京東替振)社談講・會辯雄本日大—

少年少女諸君熱狂賞讃の著名

立志小説	健男	故郷	少年少女小説	武者修行	少年探偵	熱血小説	熱血小説	熱血小説	熱血小説	決死	プリユタ
曉	兒	いづこ	涙	團子串助漫遊記	怪盗	空	世界征服	次の世界大戦	日の未來	の猛獣狩	ク英雄傳
	(一名母を慕ひて三千里)	(一名家なき子)			追撃	征服	(一名有名人種の奮起)				大山千代雄先生
歌	上井磯吉先生著	青柳白嶺先生著	平井晚村先生著	宮尾しげを先生著	佐川春風先生著	宮崎一雨先生著	宮崎一雨先生著	宮崎一雨先生著	宮崎一雨先生著	窪田十一先生著	美四六判函入
大倉桃郎先生著											洋六判
挿畫六入	洋六判	美六判	洋六判	漫畫六判	美四六判	挿畫多入	挿畫多入	挿畫多入	挿畫多入	美四六判	洋六判
送料八錢	送料六錢	送料八錢	送料六錢	送料八錢	送料六錢	送料六錢	送料六錢	送料六錢	送料六錢	送料六錢	送料六錢
定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢	定價一圓三十錢

名聲嘖々たる雄辯書類

模範的	雄辯	講演	泰西	第二	青	濱口	賀川	尾崎	鶴見	永井
式辭	の	資料	雄	青年	年	雄	豐彦氏	行雄氏	祐輔氏	柳太郎氏
挨拶	新	逸話	辯	雄	雄	幸氏	大講演集	大演說集	大講演集	大演說集
五	研	集	集	集	集	大演說集	大講演集	大演說集	大講演集	大演說集
分	究	大日本	大日本	大日本	大日本	大日本	大日本	大日本	大日本	大日本
間	加藤	雄辯會	雄辯會	雄辯會	雄辯會	雄辯會	雄辯會	雄辯會	雄辯會	雄辯會
演	堂	編	編	編	編	編	編	編	編	編
說	先生									
集	著									
大										
日										
本										
雄										
辯										
會										
編										
三										
六										
判										
函										
入										
送										
料										
八										
錢										
圓										
十										
三										
十										
錢										



